

ジョン・ダンの「風刺詩一番」 の話者について

On the Speaker in John Donne's "Satyre I"

久野幸子

1

英国では、エリザベス朝末期、1590年代に、formal verse satire (風刺詩) が一時的な大流行をみせた。これらの詩は特定の明確な form (形態) を持つものではなかったが、その内容は、風刺家である "I" (話者) が、彼の相手 Adversarius に向かって、宮廷や劇場、市街、宿屋等の種々な場面で目撃した vice and folly (人間の悪徳と愚行) を、色々な手法を用いて、非難、告発、あるいは嘲笑するというものが多い。文体としては、くだけた日常の会話体、つまり、low style (低俗体) の使用が大半を占めている¹。

丁度同じ頃、詳しくは1593年頃に書かれたとされる John Donne (ジョン・ダン, 1572-1631) の "Satyre I" (「風刺詩一番」) にも、"I" と名乗る話者、即ち、風刺家が、彼が "fondling motley humorist"² と呼ぶ相手と共に登場する。そして、彼はこの相手に誘われてロンドンの街へ出かけ、そこで目にした社会的地位や財産、外見等に惑わされる人間達の愚かな有様を、劇的独白に似た語り口で、次々と槍玉にあげていく。112行からなるこの詩は一応弱強五歩格、「二行連句」詩型をとるが、韻律も脚韻もともに不規則で、文体もほぼ低俗体である。それ故、公表された時期はずっと遅れるが³、上記の諸特徴から判断すると、ダンのこの「風刺詩一番」は、1590年代の風刺詩と極めて近い関係にあった、いや、むしろ、典型的な作品の一つであったということになろう。

ところが、ここで問題となるのが、これらの風刺詩の中心的人物である話者の人間像、つまり性格である。何故なら、批評史を辿ってみると、これまでずっと、ダンの風刺詩五篇中の話者については、当時の他の風刺詩中の話者とは、少々異なった描き方がなされている、と考えられてきたからである。例えば、Alvin Kernan は *The Cankered Muse* (1959) の中で、他の風刺詩人達と比較して、

But he [= Donne] does not elaborate on the satiric character.⁴

とし、Brian Morris は “Satire from Donne to Marvell” (1970) の中で、

He [= Donne] never creates fully realized characters and subdues himself to them.⁵

と述べ、Heather Dubrow は、

The most striking point of comparison between Donne's satires and those written by the other satirists of the period is their personas.⁶

と指摘している。とすると、ダンの風刺詩をこの「一番」に限定した場合、ダンの描く話者は、当時の風刺詩の典型的な話者と比べてどのような点でどのように異なっているのであろうか。そして、その違いは、ダンと彼の風刺詩とを理解する為に、私達にどのような手掛かりを与えてくれるのであろうか。

2

そこで、まず最初に、1590年代の風刺詩の典型的な話者とは、一体、どのような人物であったのかを、若干考察してみたい。

英国エリザベス朝の風刺詩は、英国の中世以来の風刺の伝統と、ルネサンス

期に導入されたラテン風刺詩の伝統との融合の上にもうまれている。従って、種々な点で種々な融合がなされたと考えられるが、当時の風刺詩の話者、即ち、風刺家については、大筋では、融合というより、中世的価値観を持つ風刺家が、新しいルネサンス的価値観を持つラテン風刺詩直系の風刺家に道を譲った、ということになろう。何故なら、この1590年代に登場した新しい風刺家達は、ラングランドの *Piers the Plowman* (『農夫ピアス』) と complaint poems とに代表される英国中世の風刺詩の話者がそうであったように、抑圧された階層の代弁者という公的な性格は持たされていない。彼らは常に一個人として発言する、エンニウスに始まり、ルキリウスを経、ホラティウス、ペルシウス、ユウエナリウスへと続く、ラテン風刺詩人達の描く話者に似た、都会風で、個性的な性格を持つ存在であったからである。

一方、エリザベス朝当時、風刺という語が *satyre* と綴られ、古代ギリシャのバクレスク劇で合唱隊を演じた *satyr* (半人半獣の森の神) と同一語源を持つと誤解されたこともあって、当時の風刺詩の典型的話者は、“*satyr-satirist*” として、品のない言葉を荒々しく用いる傾向があった。性格は無論、粗野で、ラテン風刺詩の話者以上に痛烈な批判を行うことが多い。その上、当時の話者はしばしば次のように、

This railer, often a disenchanted young scholar or a dissatisfied courtier, almost seems infected by the very vices and depravity that he is criticizing.⁷

彼が攻撃する悪徳に彼自身犯されており、その事実自ら気付いているばかりか、なかには、自分から、自分が汚れていることを公言する場合すらあったと言う⁸。このように当時の典型的話者は自意識過剰な人間であったが、この特徴は、勿論、ラテン風刺詩の話者の特徴の延長線上に位置づけられよう。

ところで、当時の風刺詩の話者とラテン風刺詩の話者との間には、もう一つの類似点があった。風刺詩の話者と詩人自身との関係という点である。何故なら、英国中世風刺詩の場合、話者は公的な性格を持ち、場面の中に溶け込んで

いるので、個人として発言することが少なく、従って、詩人自身との関係もごく弱い。これに対し、ラテン風刺詩の話者は、場面の前面に陣取り、個人として発言し、時には詩人自身の意見を代弁している。一方、R. B. Gill が、

... the difficulty of understanding the satiric voice of these works stems from the fact that it often represents neither consistent fictional persona nor unalloyed personal voice.⁹

と指摘するように、当時の風刺詩にも、時々、話者の声と話者の口を借りて語られた詩人自身の声とが共存していた、と思われるからである。そこで、民衆の代弁者としてではなく、個人として批判や告発をおこなうという理由から必然的に、ラテン風刺詩人の多くがその作品の中で自己防衛の姿勢をとったように、当時の風刺詩人達も度々、彼らの風刺詩の中で、自らの学識と文学的才能を誇り、風刺詩というジャンルの弁護をおこなっている。以上、これらの諸点が、当時の風刺詩の典型的な話者の特徴であったと言えよう。

3

さて、「風刺詩一番」の検討に移りたい。この「一番」とラテン風刺詩との関係については、今まで度々指摘されてきた¹⁰。確かに、二人の人物、つまり、話者とその相手が市街を並んで歩くという設定は、ホラティウスの第一巻「九番」を連想させ、前半で二人の友人間の対話が続く、後半で悪徳と愚行の実態が暴かれるという二部構成は、ベルシウスの「三番」を思い出させる。しかし、このダンの「一番」では、二人の人物が登場しているにもかかわらず、ホラティウスにおけるような実質的対話も、ベルシウスにおけるような本質的な議論もなされていない。作品の殆ど全ての部分で、話者一人が一方的な陳述を続ける——この意味では、この「一番」の話者は劇的独白を続けるユウエナリウスの話者に最も近い。つまり、Milgate が主張するように¹¹、ダンはこの「一番」の

話者の人物像を設定するに際しても、特にどれか一つのラテン風刺詩をモデルにした、というより、ラテン風刺詩中の種々な話者像の諸要素を借用、あるいは参考にしているというのが、最も受容され易い説明であろう。

では、この「一番」の話者は、具体的にどのような人物として描かれているのであろうか。便宜上、内容に従って、10のセクションに分け¹²、各セクションにおける話者の言動とその内面とを探ってみたい。

まず、第1セクション [ll. 1-12] では、話者は“street” [l. 67] へ出かけようと誘いに来てくれた相手に、自分の書斎の良さを語り、その誘いを断っている。話者は詩の冒頭から、居丈高に相手を拒絶する。

A way thou fondling motley humorist,
 Leave mee, and in this standing wooden chest,
 Consorted with these few bookes, let me lye
 In prison, and here be coffin'd, when I dye;

[ll. 1-4]

ところが、拒絶したものの、話者の心が外出に対して実は曖昧な状態であったことは、この四行に早くも暴露されている。そうでなければ、何故、話者は自分の書斎を“prison”と呼び、死んだらここに埋葬してくれ等と、不吉な比喩を用いているのであろうか。人の精神を拘束するものとして、肉体、あるいは物質を“prison”と呼ぶ比喩は、ダン自身他の作品でも用いているし、勿論、当時の常套的比喩表現の一つでもあった。だが、精神的価値を象徴するはずの書斎を“prison”と呼ぶのはおかしい。又、〈閉じられた小さな空間〉として、個室と牢獄は同じレベルに並ぶが、出入りの自由の有無が違う。個室を^{ひつぎ}棺に喩える比喩は、1597年頃書かれたとされるダンの書簡詩“The Storme”（「嵐」）にも次のように用いられているが、

Some coffin'd in their cabbins lye,

[1. 45]

ここでの比喩は、“coffin”には〈ぼろ船〉という海洋口語表現上の意味もあり、暴風雨の洋上の船室は死と隣り合わせという意味で納得できる。だが、学者の書齋を棺桶と呼ぶのはたとえ、死んだ時という条件をつけても、かなり不自然である。

次に話者は書齋に残る理由を、

Here are Gods conduits, grave Divines; and here
 Natures Secretary, the Philosopher;
 And jolly Statesmen, which teach how to tie
 The sinewes of a cities mistique bodie;
 Here gathering Chroniclers, and by them stand
 Giddie fantastique Poëts of each land.

[11. 5 -10]

と説明するが、話者が書齋に籠って自ら楽しむ書物として、“grave Divines”, “the philosopher”のものは納得できるにしても、“jolly Statesmen”, “gathering Chroniclers”, “Giddie fantastique Poëts”のものには問題がありすぎる。何故なら、“jolly”という形容辞は、術策を弄する政治家達の〈尊大で押しの強い〉性格を、“gathering”という形容辞は、そういう年代記作者達の記述がつまらぬ世俗的事実の寄せ集めであることを暗示している。又、“Giddie”という形容辞には、この詩の51行目で話者自身が批判しているように、〈気が変わり易く、浮ついた〉といった意味が強いからである。つまり、話者は自分の書齋とそこに置かれた書物についてくどくどと語りながら、無意識のうちに、自らの“giddinesses”好みを露呈させている。それでいて、彼は自分の書齋の書物を“constant company”と呼び、相手を“uncertaine”と詰るなじるのである。

Shall I leave all this constant company,

And follow headlong, wild uncertain thee ?

[II. 11-12]

ところが、この話者の気持の曖昧さは、第2セクション [II. 13-24] でも、その後のセクションでも、次々と明らかにされてゆく。先程まで、“Leave mee” [I. 2] と叫んでいた話者が、ここでは、早くも二人で出かけた場合を想定している。話者はロンドンの街で人目を引く人物として、40人の戦死した部下の給料を着服する“Captaine”や、香水の芳香をプンプンさせる粋な“Courtier”や、十数人のお伴をひきつれたピロード服の“Justice”を取り上げるが、各界を代表するそれらの人物を、各々にわずか2行という詩的空間の中に生き生きと再現してみせる話者の、いやダンの筆致は実に見事である。だが、ここで私達が見落してはならないのは、羽振りのいいこれら世俗の人物を描く話者の語り口が、批判というより、むしろ見物を楽しんでいる風すらあるという点である。話者は相手のそれらの人物へのへつらい振りをからかいつつ、実は彼自らの内に潜む“giddinesses”好みを垣間見せているのであろう。

第3セクション [II.25-36] は、祈禱書の聖婚式の宣誓句のもじりで始まっている。

For better or worse take mee, or leave mee:

To take, and leave mee is adultery.

[II.25-26]

ここで、話者は、外出を誘った相手が途中で自分のもとを離れることを〈不義〉と呼んでいるが、こういう大袈裟な比喻を用いるのが、話者の好みらしい。29行目から36行目まででは、相手が人々をその外見で判断する様をからかい、当

時の欲得ずくの交際や財産目当ての結婚を皮肉っている。だが、ここには、当時の他の風刺詩の多くに認められた、これらの悪徳に対する malcontent (不平家) のヒステリックな非難は余り感じられない。話者はあくまで傍観者として、ある余裕を持って、人間臭い当時の社会を活写しているのである。

第4セクション [ll.37-48] では、話者は “nakednesse”, “barenesse” の意義を論じている。第一行目に “motley” (道化師の雑色の服) を着た相手を登場させ、詩全体を衣服のイメージで統一してあるこの作品としては、ここが、全篇の山場の一つであることは間違いない。

Why should'st thou (that dost not onely approve,
 But in ranke itchie lust, desire, and love
 The nakednesse and barenesse to enjoy,
 Of thy plumpe muddy whore, or prostitute boy)
 Hate vertue, though shee be naked, and bare ?

[ll. 37-41]

相手が “whore” や “boy” の “nakednesse” や “barenesse” を楽しんだからといって、“naked” で “bare” な “vertue” (美德) を愛せというのは、いかにも乱暴な議論であり、詭弁に近い。だが、これらの行に続く、

At birth, and death, our bodies naked are;
 And till our Soules be unapparrelled
 Of bodies, they from blisse are banished.
 Mans first blest state was naked, when by sinne
 Hee lost that, yet hee'was cloath'd but in beasts skin,

[ll. 42-46]

では、話者は、魂と肉体、魂の至福な状態と罪によるその喪失とについて語り、彼なりの真面目さを感じさせる。ここには、読者に浮ついた議論のようだが実はそうではないと思わせる何かがある。続く次の2行では、

And in this course attire, which I now weare,
With God, and with the Muses I conferre.

[ll. 47-48]

粗末な衣服を身に纏^{まと}った話者が、詩神ばかりでなく、神の教えにも従って生きていることが明らかになる。Sicherman が指摘するように¹³、話者はここで、自らの信用状にあたるものを読者に示しているのであろう。

ところが、第5セクション [ll. 49-52] で、話者は突如、外出を決意する。冒頭での拒絶を忘れたかのように、今、話者はいそいそと出かけてゆく。

But since thou like a contrite penitent,
Charitably warn'd of thy sinnes, dost repent
These vanities, and giddinesses, loe
I shut my chamber doore, and, 'Come, lets goe.'

[ll. 49-52]

話者の相手への判断は確かだが、そこに自分が係^{かわ}ってくると、少々あやしくなる。自らの説得力を過信した話者は、ここでもう——実はそうではなかったのだが——相手が“contrite penitent”になったと考えてしまうのである。

第6セクション [ll. 53-66] でも、話者は再び、外出後を予測する。ダンはこちらで、行またがりや挿入法を含め、極めて複雑な統語法を用いているが、それにしても、話者は相手の行く先定まらぬ有様を語るのに、何故、これ程多

くの人物を事細かに描写しなければならないのか。父親のわからぬ子供を生んだ“cheape whore”も“gulling weather-Spie”も、流行の先端をいく“antique youth”も、全て、実害のない憎めぬ人物ばかり——ここでも話者は、地口や撞着語法等を駆使し、非難しているというより面白がっている様子である。次の2行、

who shall beare away

Th' Infant of London, Heire to' an India:

[ll. 57—58]

は、一挙にこの詩の世界を歴史的にも地理的にも拡大する。ダンの「一番」で用いられているこのようなイメージリーは、Zivleyの次の指摘を待つまでもなく、

... the lively spirit of Elizabethan England, and the observation of the young Donne.¹⁴

話者の、いやダンの、そしてエリザベス朝人の自由で、かつ進取の気性に富んだ精神を明示していると考えられよう。次の2行、

But how shall I be pardon'd my offence

That thus have sinn'd against my conscience ?

[ll. 65—66].

については、ここに見られる話者の罪の意識をどの程度ととらえるのかで、この詩の解釈がわかる。だが、とにかく、話者は外出を愚かな行為とだけ考えるのではなく、良心に逆らった罪深い行為ととらえていることだけは確かである。この違いの意味するところは大きい¹⁵。話者は自らの“giddinesses”好み

にも “inconstancy” にも余り気付いてはいないが、十分、倫理的でかつ宗教的な面を持ちあわせているのである。

67行目以下がこの詩の後半部分となる。前半では、劇的独白形式で話者自身の性格が明らかにされてきたが、後半では叙述の焦点が、話者が街で目撃する具体例とそれらへの相手の反応とに移向している。

第7セクション [ll. 67-78] で、ようやく二人が外出する。67行目の途中で、相手の扱いがそれまでの “thou” から “He” になるのは、相手とその具体例の一つになるからであろう。通りの建物側を即座に選ぶ相手を皮肉る箇所 [ll. 67-70] は、荒廃したローマの夜の情景を描いたユウエナリウスの「三番」を思い出させる¹⁶ が、ダンはユウエナリウスを下敷きにしつつ、エリザベス朝ロンドンの一場面を興味深く描出してみせている。69行目の “imprison'd” は大袈裟な表現だが、話者は4行目でも用いていたように、こういう比喩を好む人間なのである。相手は自らの “vanities” と “giddinesses” を侮いたはずなのに [l. 51], 街へ出るとさかんに囲りの人々に媚びへつらい、お世辞笑いで歓心を買おうとする。ここでも又、当時の雑多な人物が次から次へと登場するが、話者は相手を “prentises” や “schoole-boys”, “fidlers” に喩え、見下している。

第8セクション [ll. 79-90] では、詩人は “horse”, “Elephant”, “Ape” 等の動物のイメージリーを用い、当時評判となった出来事に言及し、読者を楽しませる。“dances”, “Indians”, “Tobacco” 等の語彙は、当時のロンドンの明るく解放的な雰囲気伝えてる。しかし、ここでも話者の相手に対する態度は一方的で、彼には自らへの反省がない。

第9セクション [ll. 91-108] では、この一方的に振舞う話者も又、相手に無視されている。92行目に “a many-colour'd Peacock” が登場するが、エリザベ

ス女王が三千枚のドレスを誇ったというこの時代、人々、とくに宮廷人達が衣裳に大きな関心を抱いていた、いや抱かざるを得なかった事実は容易に想像できる。しかし、話者は外見を飾る——他人に成り済ます——ことの意義を認めず、従って、着飾った宮廷人も他者を演じる役者も共に軽蔑する。相手は周囲を見回し、興奮ざみ、しかし、そんな相手に話者は辛辣に切り返す。

'Why? he hath travail'd.' 'Long?' 'No, but to me'
 (Which understand none,) 'he doth seeme to be
 Perfect French, and Italian.' I reply'd,
 'So is the Poxe.'

[II. 101-104]

ところが、第10セクション [II. 109-112] で、相手がとうとう話者を置き去りにして、馴染みの情人のところへいってしまう。

At last his Love he in a windowe spies,
 And like light dew exhal'd, he flings from mee
 Violently ravish'd to his lechery.

[II. 106-108]

しかし、相手はその情人の部屋からすぐさま叩き出され、頭を垂れて話者のところへ戻ってくる。

Many were there, he could command no more;
 He quarrell'd, fought, bled; and turn'd out of dore
 Directly came to mee hanging the head,
 And constantly a while must keepe his bed.

[II. 109-112]

最後の行で“constantly”という語が用いられ、“inconstant”な相手が“constantly”に寝台に横たわる、ということがこの詩の落ちになっている。だが、勿論、これは単なる言葉の遊びでしかなく、“fondling motley humouist”は詩の終りになっても“inconstant”なままであり、この風刺詩の主題の根本的な解決になっていない。つまり、話者の説得は相手を納得させ得ず、彼の一方的な忠告は一つ実を結ばなかったのである。

以上の検討から、私達はこの「一番」の話者について、次の三点をその特徴として挙げることができよう。その第一は、話者は一方的に相手の inconstancy を責めているが、話者自身も inconstant な人間であり、しかもそのことに殆ど気付いていない、という点である。自らが批判する欠陥を話者も持つ、これは、当時の風刺詩の話者の多くと共通する性格である。だが、「一番」の話者には、ホラティウスの「九番」の話者にみられる自らを客観視する余裕がなく、マーストンやホール等の描く話者の持つ強烈な自己認識が欠落しているのである。

第二の特徴は——これは第一の特徴から類推できることであるが——この「一番」の話者が、風刺詩の弁護や自己の文学的才能の誇示といったことを一切おこなっていないという点である。話者はそれらをおこなう程ははっきりとした自意識を持った人間ではない。

第三の特徴としては、話者の宗教的関心は十分に真剣なものらしい、という点をあげたい。話者にはキリスト者が当然持つべき寛大さや謙譲の精神が欠けているが、外出を罪深い行為ととらえている点、しかもその罪をただ概念としてではなく、彼の内面で受けとめようとしている点〔ll. 65-66〕等は注目に値しよう。Peter はダンの罪の取り扱い方は complaint poems 中のそれと比べると、気楽で安易であるとしている¹⁷。だが、当時の他の風刺詩の話者と比較すると、この「一番」の話者の宗教的関心は単に表面的なものではない、ということが明白になる。話者の風刺家としての哲学は、ストイシズムでもネオ・

ストイズムでもなく、はっきりとキリスト教教義なのである。

4

では、何故、ダンは「一番」の話者をこのような自己矛盾をはらんだ、自己認識を欠くキリスト者として描いたのか。実はこの話者の人間像こそ、これまで多くの批評家を悩ましつづけた「一番」解釈上の最大の難問であった。それも特に、〈話者が何故、外出したのか〉この点が最も説明しにくい。

ところで、この人間像に関しては、これまで大別して三系統の異なった解釈が考えられてきたと思う。一つは、この詩の話者を一人の人間とは考えず、話者と相手との対話を、一人の人間における“internal debate between soul and body”と考える解釈である。これは Shawcross (1967) に代表されるが、Newton (1974) も、Lauristen (1976) も同じ様に解釈している¹⁸。こういう解釈をする批評家は、ダンの風刺詩五篇全篇中の話者を同一人物と考え、話者が次第に自己に目覚め、風刺家としての自我を確立していく、と考えることが多い。そうすると、「一番」の話者をまだ未熟な状態にあるととらえることになるので、話者の外出についても、

... the speaker suddenly and inexplicably decides to leave his chamber——¹⁹

とし、外出の理由を無理に説明しようとはしないのである。

二つ目に取り上げたいのは、この話者の言動の背後にキリスト教教義を大きく読み込む解釈である。この解釈は Geraldine (1966) に始まり、Bellette (1975)、Elliott (1976)、Hester (1982) と続いている²⁰。これらの批評家はこの話者を“Christian satirist” ととらえる。だが、こうとらえても、やはり、話者の外出

の理由づけには苦慮している。尤も、Geraldine は話者の “giddinesses” 好みには気付いてはいないので、話者は . . . yield to importunate persuasion²¹とさりげなく説明し、一方、Hester は、

A scholar . . . touched somewhat by the melancholy of that vocation.²²

とやや漠然とした理由づけを行っている。

上記二系統の解釈に対して、三つ目にあげたいのは、詩人ダンが話者をも批判、嘲笑している、とする解釈である。これは、Sicherman が “The Mocking Voice of Donne and Marvell” (1969) で、次のように主張したのが最初である。

. . . in “Satyre I”: the poet endorses his speaker’s mockery at the same time that he mocks, not unsympathetically, the speaker’s vehemence, unmitigated as it is by self-criticism.²³

ところが、Parker and Patrick は、Sicherman の解釈を更に先へ進め、〈ダン は「一番」の中で、話者のキリスト教教義に基づく言動を、独善的で自己欺瞞的であると非難している〉と主張した(1975)。つまり、ダンが話者と相手の二人を風刺の二大標的としていると解釈するのである。

Donne’s “Satyre I” is a poem carefully constructed to bring out and inter-relate two main themes — self-deception, exemplified by the speaker and inconstancy, exemplified by his ‘friend.’ Both characters are satirized.²⁴

こう考えると、話者は詩人とは全く切り離された存在となり、詩人から完全に独立してしまう。しかし、私達には、この詩からは話者の声に混じって、時々ダン自身の声も聞こえてくるという印象は拭いきれないのではないだろうか。

5

以上、「一番」の話者について、批評の流れをごく簡単に辿ったが、結局、私達はこの話者をどのように考えたらいいのであろうか。

まず、民衆の代弁者としてではなく、個人として発言し、自らが攻撃する悪徳に自分も犯されているという点では、既に述べたとおり、「一番」の話者は当時の典型的話者に近い。ところが、話者の自己認識、自覚という点、一つの作品の中に共存している話者と詩人自身、この二人の関係という点と、話者（あるいは詩人自身）による風刺詩の弁護、風刺詩論という点になると、少々ことが面倒になる。何故なら、「一番」の話者は自覚を欠き、話者とダンとの関係は、Lauristen が主張する程、一心同体的でもなければ、Parker and Patrick が説く程、懸け離れていた訳でもない。又、「一番」では、風刺詩の弁護等、全くおこなわれていないからである。とすると、この「一番」におけるダンと話者との関係はどのようなものであったのか。

ダンは「一番」の話者を曖昧な自己矛盾をはらんだキリスト者とした。だが、これによってダンが話者を嘲笑していると断定するには、話者を描くダンの筆致に当然必要とされる相手を突き放すような手厳しさが欠落している。又、話者を“Christian satirist”と決めてかかるには、彼には余りに自覚が乏しい。つまり、この「一番」の話者は、この小論の始めの部分で引用した Kernan の指摘にあったように、その人間像、性格が入念に練り上げられた人物とは言い難いのである。そこで、私としては、ダンがこの「一番」の話者をこのように曖昧な存在として描いたのは、それなりの理由があった、と考えたい。それは何か。ダンはこの「一番」の中に、当時の彼——リンカーン法学院在籍二年目、世の中の墮落と腐敗に嫌悪を覚えつつ、それでいて殉教者に成り得ないまま、そんな世の中へ出るチャンスを狙っていた——の内面に潜む曖昧さを、微妙に屈折させた形で表現しているのではないだろうか。勿論、この時のダンには、話者の弱さは自分自身の弱さであり、結局は人間存在そのものにつきまとう本

来的弱さである、という現実認識があったに違いない。ダンには話者の inconstancy をからかっているが、心の奥で、自分自身にも同じ傾向があることに気付いていた。従って、「一番」の話者はダンその人ではないが、ダンの内面を反映している。話者はダンであって、ダンではないのである。

先に私は、この「一番」には風刺詩の弁護が見当たらない、と述べたが、実は、〈自ら欠陥を持ちながら、それに気付かず他を風刺する風刺家を描くこと〉これがこの「一番」に示されたダンの風刺詩論であったとも言えよう。つまり、ダンには「一番」において、風刺詩を書きながら、同時に風刺詩というジャンルを風刺している訳で、このどこか醒めているようなダンの風刺詩への姿勢が、彼の描く話者に、マーストンやホルの描くような具体的でかつ輪郭のはっきりした人間像を与えるのを拒んでいたのかもしれない。だが、とにかく、「一番」の話者を描写するに際して働いたダンのこの抑制力こそ、Kernan も認めているように、²⁵ 彼の風刺詩五篇を、当時書かれた夥しい数の風刺詩の中で、最もよく筋が通り、しかも最も形の整った作品とした極めて重要な要素の一つであったことは確かである。

(1985. 1. 24)

注

- 1 Marjorie Donker and George M. Muldrow, *Dictionary of Literary-Rhetorical Conventions of the English Renaissance* (Greenwood Press, 1982), 181.
Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics (Macmillan, enlarged edition, 1974), 738.
- 2 W. Milgate ed., *John Donne, The Satires, Epigrams and Verse Letters* (Oxford at the Clarendon Press, 1967), 3. 以下、ダンの satires, verse letters の引用は全てこの版からとする。
- 3 ダンの風刺詩五篇は1633年に出版されている。
- 4 Alvin Kernan, *The Cankered Muse* (Archon Books, 1959), 117.
- 5 Brian Morris, "Satire from Donne to Marvell," *Metaphysical Poetry*, edited by Malcolm Bradbury and David Palmer, Stratford-Upon-Avon Studies, 11, (Edward Arnold, 1970), 214.
- 6 Heather Dubrow, " 'No man is an island': Donne's Satires and Satiric Traditions,"

SEL, 19 (1979), 80.

- 7 *Dictionary of Literary-Rhetorical Conventions of the English Renaissance*, 185.
- 8 Kernan, *op. cit.*, 114.
- 9 R.B. Gill, "A Purchase of Glory: The Persona of Late Elizabethan Satire," *SP*, 72 (1975), 409.
- 10 例えば、重要な論文としては次の三点がある。
Howard Erskine-Hill, "Courtiers out of Horace, Donne's *Satyre IV*; and Pope's *Fourth Satire of Dr John Donne, Dean of St Paul's Versified*," *John Donne, Essays in Celebration*, edited by A.J. Smith (Methuen CO LTD., 1972), 273-307.
Barbara L. Parker and J. Max Patrick, "Two Hollow Men: The Pretentious Wooer and the Wayward Bridegroom of Donne's "Satyre I"; *SCN*, 33 (1975, Spring) 10-14.
Y. Shikany Eddy and Daniel P. Jaeckle, "Donne's "Satyre I": The Influence of Persius's "Satire III"; *SEL*, 21 (1981) 111-122.
- 11 Milgate, *op.cit.*, xviii, xxii.
- 12 このセクション区分については、Parker and Patrick, *op.cit.* を参考にした。
- 13 Carol Marks Sicherman, "The Mocking Voices of Donne and Marvell," *Bucknell Review*, 17 (1969), 40.
- 14 Sherry Zivley, "Imagery in John Donne's *Satyres*," *SEL*, 6 (1966), 95.
- 15 例えば、Everald Guilpin は彼の「風刺詩五番」(1598年出版)を次のようにダンの「一番」冒頭の書き換えで始めているが、彼は〈外出〉を folly とのみ考えている。

Let me alone, I prithee, in this cell:
Entice me not into the city's hell;
Tempt me not forth this Eden of content
To taste of that which I shall soon repent.
Prithee excuse me, I am not alone—
Accompanied with meditation
And calm content, whose taste more pleaseth me
Than all the city's luscious vanity.
I had rather be encoffined in this chest
Amongst these books and papers (I protest)
Than free-booting abroad purchase offence
And scandal my calm thoughts with discontents. [11.1-12]

[*Tudor Verse Satire*, selected and edited by K.W.Gransden (Athlone Press, 1970) 122-123 から引用.]

- 16 *Juvenal and Persius* (Loeb Classical Library series, No. 91), 52.

- 17 John Peter, *Complaint and Satire in Early English Literature* (Oxford at the Clarendon Press, 1956) , 134–135.
- 18 John T. Shawcross, *The Complete Poetry of John Donne* (Doubleday Co., 1967), 397.
Richard C. Newton, "Donne the Satirist," *TSLL*, 16; 427–445 (1974), 431.
John R. Lauristen, "Donne's Satyres: The Drama of Self–Discovery," *SEL*, 16 (1976), 117–130.
- 19 Lauristen, *ibid.*, 121.
- 20 Sister M. Geraldine, "Donne's Notitia: *The Evidence of the Satires*," *UTQ*, 36 (1966), 24–36.
A.F.Bellette, "The Originality of Donne's Satires," *UTQ*, 44 (1975), 130–140.
Emory Elliott, "The Narrative and Allusive Unity of Donne's *Satyres*," *JEGP*, 75 (1976), 105–116.
Thomas Hester, *Kind Pity and Brave Scorn, John Donne's Satyres* (Duke U.P., 1982), 17–31.
- 21 Geraldine, *op. cit.*, 26.
- 22 Hester, *op. cit.*, 18.
- 23 Sicherman, *op. cit.*, 38.
- 24 Parker and Patrick, *op. cit.*, 10.
- 25 Kernan, *op. cit.*, 118.